# 二者関係における信頼

大山　薫*・恒吉徹三

Trust in Dyad

OHYAMA Kaoru, TSUNEYOSHI Tetsuzo

(Received September 27, 2013)

**キーワード：**信頼、安心、二者関係、質的研究

## Ⅰ　問題

我々は、生きていくうえで様々な対象を信頼しながら過ごしている。「信頼」という言葉は生活の中で様々な場面で使われているが、あまりにも当然視されているために、よほどの裏切りにあわない限り信頼そのものについて十分に考えることもなく生きている。社会そのものも、経済を含め信頼によって成り立っており、人間関係の中で生きていくためには、相手への信頼が生活する上でも重要である。

信頼を取り上げた従来の研究は、精神分析理論による基本的信頼、社会的学習理論による対人的信頼、実験社会心理学におけるゲーム理論の３つの方向からされているといわれている(中井・庄司，2006)。天貝（2001）は、山岸（1998）のゲーム理論が扱っているのは態度や特性としての一般的信頼であり、個別の関係における信頼ではないことを指摘し、感情としての観点から信頼を検討している。さらに、中井・庄司（2006）は信頼感がいまだ抽象的な概念であり、信頼感に対して今後さらに実証的な研究の必要性があることを指摘している。つまり、信頼感を抽象的概念としてではなく感覚としての信頼を個人がどのようにとらえているのかを、具体的に検討する必要がある。

そこで本研究では、二者関係における感覚としての信頼の構造をより具体的にとらえることを目的とする。

## Ⅱ　予備調査

### 1．目的

二者関係における信頼の構造の概要を質的に把握することを目的とする。その際、半構造化面接が妥当な方法論であるかも合わせて検討する。

### 2．方法

本研究では、インフォーマント（以下，Info.）自身の信頼の認識をより具体的で詳細な要

＊山口大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校臨床心理学専修

素を抽出するために、理論ベースの仮説検証型の方法よりも、仮説生成型の質的研究が適していると判断して採用した。

**1）Info.**：女性６名（平均年齢24.3歳，*SD*＝11.13，17～49歳）。

**2）調査期間**：2011年７月５日～７月27日。

**3）手続き**：一人当たり60分～90分の半構造化面接を行い、その場でメモを取った。全てのInfo.に対して以下に示す面接項目①の内容から質問を行い、基本的には項目番号順に質問した。項目①の回答が、項目②～④の内容に関わっている場合には、その内容について詳しく質問を行い、Info.の回答の流れに添ってインタビューを行った。次に、Info.自身から回答がでていない項目について質問を続け、項目①～④の内容について、一通りの情報が得られたところでインタビューを終了した。

**4）面接項目**：半構造化面接の際に用いた項目を以下に示した。

①信頼をどのようにとらえているか
②信頼している対象
③信頼している相手との間にある具体的なエピソード
④信頼できる相手に必要な条件

## 3．結果

**1）分析方法**：KJ法を参考に、以下の手順で分析した。

(1)　ラベル作り：メモを元に発言が単一の意味を持つ最小限度のまとまりに分け、それぞれを付箋（以下、ラベル）に転記した。

(2)　グループ編成：作成したラベルを広げ、類似したものを集めてセットにし表札をつけ（心理学専攻の学部生２名と臨床心理学の教員１名で協議）、小グループを構成した。次に、小グループを並べ直し、類似したものを集めて中グループを生成し、さらに、大グループを構成した。その際、生成されたグループの内容を再検討し適当ではないものは除外し再編成した。

(3)　図解化：大グループ間の関係を図示した。

**2）生成されたグループ**：31個の小グループ（以下“　”で表す）が、14個の中グループ（以下【　】で表す）になり、５個の大グループ（以下＜　＞で表す）にまとめられた。＜対象の属性＞はInfo.が信頼している相手の性質で、【客観性】【堅実性】【親密性】の中グループからなる。＜関係の形成＞はInfo.が信頼関係を形成する過程で必要なもので、【継続】【密度】の中グループからなる。＜求められる関係のあり方＞はInfo.が信頼関係の中で求めている関係のあり方で、【相互性】【安心感】【受容】【頼る】【一定の距離感】の中グループで構成された。＜危険性＞はInfo.の信頼関係における危険性であり、【曖昧さ】【過信】【裏切り】の３つの中グループによって構成された。＜対象＞はInfo.が信頼できる対象であった。

## 4．考察

本研究では、二者関係における信頼についてインタビューを行い、質的に検討した。その結果、小グループが30個、中グループが14個、大グループが５個生成された。

＜求められる関係のあり方＞は、＜関係の形成＞と＜対象の属性＞から影響を受けているという結果が得られた。これは、【客観性】が【一定の距離感】へ、【親近感】が【受容】、【堅実性】が【安心感】へと影響を与えていることから考えられた。これらの＜対象の属性＞が備わることと、＜関係の形成＞の、Info.と対象が関係を築くための要素が影響することで信頼が

形成されていくものと考えられた。この結果は、水野（2004）が、《関係の変化》というカテゴリーの「関係の形成」、「関係の深まり」が現在の信頼関係に影響を与えていると述べていることと一致するものであった。

予備調査の研究方法で、二者関係における信頼について概要が把握できたことから、半構造化面接は妥当な方法論であり、本調査でもこの手続きを踏習する。さらに、文脈も加えて判断するためICレコーダーに面接内容を録音して逐語録を作成し、詳細にグループ間の関係をとらえることとする。

また、調査対象者の年齢層が17歳～49歳と幅広かったが、天貝（1997）によると、信頼感の発達は生涯に渡って続くことが示されており、本調査では年齢を限定し、大学生を対象とする。さらに、水野（2004）によると、青年の友人関係を扱った研究では、仮説検証型の研究が多いと指摘されており、信頼についてより具体的で詳細に検討するために、本調査では仮説生成型の質的研究法を用いることにする。

## Ⅲ　本調査

### 1．目的

二者関係における信頼がどのようにとらえられているのか、信頼にはどのような構造が含まれるかについて大学生を対象者として検討する。

### 2．方法

本研究では、予備調査の結果を考慮した上で、質的研究法を採用し手続きを一部修正した。

**1）Info.**：女性９名（平均年齢19.3，$SD=0.82$，18～21歳）。

**2）調査期間**：2011年11月４日～12月23日。

**3）手続き**：予備調査と同様に半構造化面接（60分～90分）。ただし、Info.に許可を得てICレコーダーに録音した。以下に示した面接項目についての質問手順も、予備調査と同様である。

**4）面接項目**：

①信頼をどのようにとらえているか

②一番信頼している対象

③一番信頼している相手との間にある具体的なエピソード

④他にも信頼している相手との間にある具体的なエピソード

### 3．結果

**1）分析方法**：KJ法を参考にした。逐語録をＡ４サイズの用紙に印刷し、以下の手順で切り分け、分類した。①ラベル作り：逐語録を発言の文脈ごとに切り出した。②グループ編成：手順は予備調査と同様。但し、ラベルの類似性の判断は、心理学専攻の学部生１名と臨床心理学専攻の教員１名で協議し、合意が得られない場合は、心理学専攻の学部生１名を加えて協議した。

**2）生成されたグループ**（Table１）：40個の小グループが、20個の中グループにまとめられ、最後に６個の大グループにまとめられた。

**Table 1　生成されたグループ**

| 大グループ | 中グループ | 小グループ |
|---|---|---|
| 関係特徴 | 個人であること | 距離のある関係 |
| | | 離れてから気づく |
| | | 自然に出来上がっている関係 |
| | 相互性 | 相手に何かしてあげたい |
| | | お互い |
| | 言いにくいことも言える | 共通の目的があることによる言い合う関係 |
| | | 言いにくいことも言い合う関係 |
| | | 厳しいことも言える |
| | | 本音が言える |
| | 共有 | 共感 |
| | 頼る | 頼りにできる |
| | | 素直に受け入れられる |
| | 受容 | 相手に何かしてもらいたい |
| | | 何かしようとしてくれる |
| | | わかってくれる |
| | 安心感 | 安心 |
| | | 見守ってくれる |
| | 気づかいのない | 気を使わない相手 |
| | | 心を許せる |
| 関係の形成 | 理解 | 対象を知ること |
| | 期間 | 期間 |
| | | 関係の継続性 |
| | 頻度 | 頻度 |
| | | 距離の近さ |
| | | つながり |
| | 環境 | 対象の少なさによる親密さ |
| | 困難さ | 維持の困難さ |
| 対象の属性 | 近さ | 価値観の近さ |
| | 疑いのない | しっかりした |
| | | 嘘をつかない |
| | | 疑わない |
| | 公平さ | ひいきしない |
| | 堅実 | 約束は守ってくれる |
| 相談 | 相談 | 相談しない |
| | | 相談する |
| | | 相談される |
| 度合い | 度合い | 度合い |
| | | 信頼をこえた存在 |
| | | 口だけの信頼 |
| 対象 | 対象 | 対象 |

＜関係特徴＞は、信頼関係の中で、個人としての存在や、関係をどのようにとらえているかである。＜関係の形成＞は、対象との関係、＜対象の属性＞は、信頼する対象の属性である。＜相談＞は、相談のとらえかた、＜度合い＞は、信頼をどのようにとらえているかである。

**3）図解化**：大・中グループ間の関係について図示した（Figure 1）。

＜対象の属性＞は、【公平さ】【疑いの無い】【堅実】（以下《公平さグループ》）と、【近さ】に分けられた。

＜関係の形成＞は、【環境】の「（学科の）女子が２人なので、結構その女子とは信頼してる」という発言もあることから、【頻度】と【期間】を高める要素ととらえ、【期間】の“関係の継続性”が【理解】を促進する要素と判断した。また、【理解】は【安心】に影響を与えていると判断した。【困難さ】は独立したが、“距離のある関係”に促進的影響を与えている。

＜関係特徴＞は、《安心感グループ》、《相互性グループ》、《個人であること》に分けられた。さらに、《相互性グループ》の５つの中グループのうち、【言いにくいことも言える】【相互性】の２つのグループはまとめることができた。《安心感グループ》の“見守ってくれる”という要素が、《個人であること》の「実家にいる時は気づかなかったんですけど、離れて、何かあったり、迷ったりすることがあるとすぐに母に電話して」というデータに影響を与えていると考えられた。また、《安心感グループ》の「気をつかってないです、何言ってもいい」というデータが、《相互性グループ》の「馬鹿できる時は馬鹿できるし、でも、ちょっとやりすぎやろって言って注意もしてくれる」というデータに影響を受けていると考えられた。これらのことから、《相互性グループ》と《個人であること》は《安心感グループ》によって促進的影響を受けていることによりまとめられた。

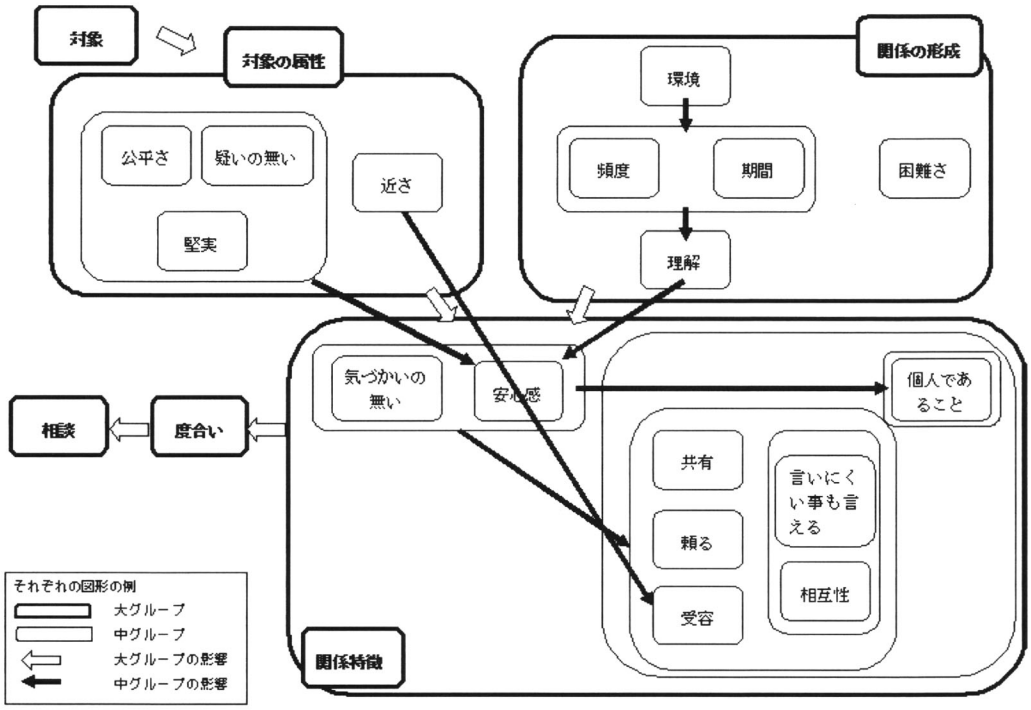


**Figure 1　大グループと中グループの関係**

予備調査とは異なり＜度合い＞と＜相談＞が構成された。＜度合い＞は、＜関係特徴＞に含まれる要素でInfo.が対象を判断していることが示された。そのため、＜関係特徴＞により＜度合い＞は促進的な影響を受けていると考えられた。

さらに、＜相談＞は【相談しない】【相談する】【相談される】という行動の判断によるグループで、「トラブルが起きた時に相談する相手を選ぶ」というデータから、＜度合い＞よって影響を受けていると考えられた。

## 4．考察

本研究では、予備調査の結果も踏まえ信頼について質的に検討した。二者関係における信頼を構成する＜関係特徴＞＜関係の形成＞＜対象の属性＞＜相談＞＜度合い＞＜対象＞という6つの要素を抽出した。

＜対象の属性＞の《公平さグループ》は、中本（2007）で『相手のパーソナリティ』としてまとめられている。本研究でも、信頼できる対象を具体的にイメージさせて質問したことで、【公平さ】【疑いの無い】【堅実】といったパーソナリティとかかわる＜対象の属性＞グループが生成されたと考えられた。本研究で得られた内容は、対象のパーソナリティの全体像をとらえているとは言えないが、一側面についてとらえたものと考えられる。また、「考え方が近い」という【近さ】グループを抽出することもでき、パーソナリティ以外の要素も求められていると考えられた。

＜関係の形成＞は、水野（2004）の『関係の変化』としてまとめられたものと類似するが、相違点として「理解」という概念を含んだグループが上げられる。本研究の分類では、【理解】は＜関係の形成＞グループに含まれ、《安心感グループ》に影響を与えている。水野（2004）は「相手への理解」が『安心』グループに含まれている。これらのことから、安心が信頼に影響を与えていることが考えられる。

これは、安心の概念を用いることは信頼の概念をとらえる上で有効であり、従来の研究で、安心と信頼を区別することなく定義されてきたことが、信頼が明確にされなかった要因だとする山岸（1998）の指摘とも一致する結果である。さらに、相手の能力に対する期待と、相手の意図に対する期待も区別すべきだと山岸（1998）指摘している。しかし、西垣ら（2004）の医療に対する信頼の研究では、関係の形成に関わるカテゴリーは生成されておらず、患者の信頼には医師の「意図」と「能力」が含まれており、この側面を切り離して考えることは難しいと指摘している。つまり、含まれている要素が異なるのは、専門的な関係と日常的な関係では、信頼について質的な相違があることによるものと考えられる。

＜関係特徴＞は《相互性グループ》《個人であること》《安心感グループ》の3つのまとまりから構成された。《安心感グループ》は《相互性グループ》と《個人であること》に促進的影響を与えている。また、《安心感グループ》は＜対象の属性＞の《公平さグループ》と＜関係の形成＞の【理解】からも影響を受けている。このことから、二者関係における信頼にとって、安心は信頼を促進させる要素であると考えられる。これは、水野（2004）も現在の関係は安心を中心にした関係だとしている点と一致している。また、《相互性グループ》と《個人であること》は＜関係特徴＞の構成要素だが、これらの関係は、頼ることや、受容されたりすることを望む関係と、お互いが個人として独立して存在していることが、バランスよく両立することで関係が成立していると考えられる。これは、水野（2004）の『自立／自律』というカテゴリーからも、いざという時に頼れる関係であることが、自立／自律につながっているという指摘と

一致している。本研究では“共通の目的があることによる言い合う関係”の具体的な発言に、「今言っとかないと、このまま進むとおかしいんじゃないのってちょっと違うと思う、喧嘩になってもいいから言っとこう」とあることから、関係が崩れる可能性があっても相手に伝えるという要素についても抽出することができた。

＜対象＞を説明する具体的な発言には対象がInfo.にとってどのような人か、という言葉が含まれており、対象それぞれに他のグループとの関連があった。

＜度合い＞や＜相談＞は、＜関係特徴＞から促進的影響を受けているが、＜相談＞という行為をすることによって、さらに＜関係の形成＞＜関係特徴＞へと影響を与えてくものと考えられる。つまり、信頼は関係の中で起こる行動によって、常に要素間で影響を受け続けていることを示唆している。

本研究の目的は、抽象的な概念としてとらえられてきた信頼を、二者関係の中で具体的に抽出することであった。その際、質的な方法を用いたことで、先行研究とは異なる信頼の構成要素や、構成要素間の関係がとらえられた。特に、《安心感グループ》は＜関係特徴＞の他のグループにも影響を与えていることから、信頼関係は安心によって促進的影響を受けていることは重要な知見であると考えられた。さらに、＜関係特徴＞の中に、相手の役に立とうとする《相互性グループ》と《個人であること》が含まれることから、信頼関係では、互いを個人として認め合った上で、お互いを支え合うことを重要視していると考えられた。また、一番信頼できる相手との信頼関係について質問をしたことで、信頼という言葉で一番大切にされている要素を抽出することができ、信頼概念の中心的な構造の一部がとらえられた。しかし、対象を特定しなかったために、信頼される対象間の要素の比較はできなかった。

今後の課題は、性別を要因として組み入れることや、データが理論的飽和状態に達するまで対象者数を増やすことで、さらに詳細で一般化できる特徴がとらえられるよう検討することである。また、青年期後期に位置づけられる大学生だけを対象者としたことから、水野（2004）のカテゴリーに含まれる「不安」や、天貝（1996）の指摘している信頼感について、発達的な観点からも検討していく必要がある。

## 文献

天貝由美子（1996）．特性的および類型的観点からみた信頼感の発達．筑波大学心理学研究，**18**，129-133.

川喜田二郎（1986）．KJ法渾沌をして語らしめる．中央公論社，pp. 121-169.

水野将樹(2004)．青年は信頼できる友人との関係をどのようにとらえているのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成．教育心理学研究，**52**，170-185.

中本麻美（2007）．大学生における特定の他者への信頼の構成要因について．山口大学教育学部卒業論文.

西垣悦代・浅井篤・大西基喜・福井次矢（2004）．日本人の医療に対する信頼と不信の構造—医師患者関係を中心に．対人社会心理学研究，**4**，11-20.

山岸俊男（1998）．信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム．東京大学出版会.